

「赤城神社本殿」見学メモ

2022年12月11日

2026年3月1日改訂

作成：高橋 眞

日時：2022年11月20日（日）11時30分より

内容：観光情報センター主催の「流山をA・RU・KU 赤城神社本殿見学と本町の七福神をめぐる」のガイドの中で赤城神社の本殿を見学。氏子総代山崎氏をはじめ氏子の方々、流山博物館より北澤次長他数名も参加。

1. 山崎総代より：

- ・「流山にもこんな素晴らしい文化財があるんだ、ということを知っていただければと思います」（上記の他はよく聞き取れなかった）

2. 拝殿の入口にて（北澤次長の説明）：

- ・神社の作りの説明。氏子さん達が拝礼する拝殿と、拝殿の奥に神様を祀ってある本殿と大きく二つに分かれている。通常は本殿の中は見られない。今日は特別に見せてもらえる。
- ・この神社は「流山発祥の地のシンボルとしての神社」である、ということを見て感じてもらえればと思う。
- ・まず拝殿について。明治42年に作られたもの。拝殿の上り口の賽銭箱の両側の「奉納」と書かれた石段に拝殿を作った方々、関わった大工さんなどの名前と「明治四十二年十月」の日付が彫られている。（下記写真参照）（人名等の詳細は追加資料①参照）



- ・古い建物には必ず屋根裏に「棟札」があり、いつこの建物が建ったか、というものが残されている。
- ・（拝殿建設時関係の手元史料を示して）この中に「秋元常五郎、秋元平八、秋元佐治衛門」の3人の名前がある。秋元平八は5代目。「森のアトリエ黎明」のある所に住んでいた。秋元常五郎は秋元本家から分家されて、当時土浦に住んでいた。本家の秋元三左衛門が代替りしたばかりでまだ幼かったので、常五郎が後見人として面倒を見ていた。（注釈：秋元常五郎；本名は矢口常五郎、9代目秋元三左衛門の娘婿で秋元梧楼のこと。句集『三愚集』の編者）秋元佐治衛門は、秋元本家2代の頃に分家された家で、実はその後の経過がよくわかっていなかったが、この棟札が出てきた。今どうなっているかは秋元本家、平八家に聞いても不明とのこと。上り口の石段（上記写真の左側中央部）にも「秋元佐治衛門」の名があり、少なくとも明治42年の段階では住んでいたと思われる。また、この3名の名前の下に、「秋元本家の他、万上の堀切紋次郎、流山の町長をされた中村権治郎さん、宿の関根新介さん」などの有力な方々の名前がある。これらの方々がこの拝殿を作るにあたって寄進していることがわかる。（追加資料②参照）

3. 拝殿の中で（北澤次長、氏子の方、岡理事の説明）：拝殿の特徴

- ・（北澤次長）この拝殿は他の神社と違うところがある。拝殿を取り囲む扉は取り外しができる。拝殿全体を開けっ広げにできるようになっている。ここでお神樂ができるようにしていたのではないかと考えられる。普通はこの扉は開かない。この神社の特徴である。
- ・（氏子の岩橋さん）かつては両側の扉に板絵があったが、左側の扉は戦後修理され、板絵が無くなった。
- ・（岡理事）板絵は、寺崎広業という東京美術学校（現東京芸大）教授が弟子を引き連れて描いたと伝わる由緒あるもの。
- ・（北澤次長）板絵はだいぶ色あせてしまった。こうしたものの保存は難しい。（下記写真参照）



（何が描かれているのか、については追加資料③を参照）

4. 本殿見学の前に（北澤次長の説明）：

- ・本殿は寛政元年（1789）に作られたもの。手前にある橋掛りは天保年間。今の拝殿とピッタリ合っていないので明治42年以前には別の建物（拝殿）があったのは間違いないと思われる。

5. 本殿見学の後（北澤次長の説明）：

- ・この神社の素晴らしいところは本殿の彫刻。同じような素晴らしい彫刻があるのは市内では諏訪神社とここが一二を争う。本殿はなかなか見られない。普通は隙間からそっと見える程度。神社は町の人々の寄進によって作られるものなので、地元の人がこの神社を愛していないと作れない。（下記写真参照。4枚）





- ・寛政年間は歴史の教科書で言うと松平定信の「寛政の改革」の頃。
- ・本殿の棟札には、本殿建立の人々の名前などが記載されていた。
(岡理事の資料の棟札「当社建立記」のほうの写真をもとに北澤次長の説明)
- ・赤城神社の創建は不明と書いてある。わかっているのは元和6年(1620)再建されたこと。江戸時代が始まって少し経った頃に再建と書いてある。ということはそれ以前に既にあった、ということ。その後の貞享元年(1684)に再度再建している。そして享保18年(1733)吉宗の時代、この扁額にあるように神祇官より「正一位」の「宣旨」を拝領。国学院大学の先生によると、吉田神道はある程度寄付をすれば「正一位」は授けられるということなので、この当時(享保年間)ある程度のお金が貯まったので「格を上げよう」ということになったのではないかと推測されている。
- ・寛政元年(1789)の建立の発願は光明院の住職。当時は光明院と赤城神社は一体だった(別当寺)。諏訪神社と成願寺の関係も同じ。
- ・大工棟梁は現埼玉県本庄市に住んでいた大工(植原藤七)。(筆者加筆:彫物棟梁は現深谷市住人高松藤吉)
(下記写真参照。左の写真は『流山建物ア・ラ・カルト』より iPhone で撮影)



棟札1 寛政元年(1789) 撮影:日塔和彦

木札 寛政元年(1789) 撮影:日塔和彦



「正一位赤城大明神」の拝殿扁額

寛政元年(1789)の本殿棟札

- ・寄進者のメインとして秋元三左衛門の名もあるが、(享保19年の木札などには)飯嶋重左衛門の名前がある。最近では秋元三左衛門の家と堀切紋次郎の家がメインの寄進者と考えられているが、それ以前のメインになっていたのがこの飯嶋重左衛門家だったのではないか、と思われる。この飯嶋家は江戸時代の中期から後期にかけては酒造りをしている、堀切家と同じ「紋次郎」を名乗っていた。江戸時代の終わり頃に商売がうまくいかなくなり、その後、家はほぼ断絶してしまったようだ。飯嶋家の存在はこれまであまり注目されなかったが、棟札が出てきて、秋元家や堀切家が栄える前は飯嶋家がこの地区の中心だったことがわかった。家やお墓がどこにあったか不明だった。流山寺と赤城神社の間に目立たないお墓があるが、そこがほぼ間違いなく飯嶋家のお墓と思われる。建物の外観だけでなく、いろいろ調査していくと今まで私達が知らなかったことや歴史的な事実がわかっていくことがある。
- ・彫刻なども、これだけのものを、人を呼んで作れるということは、地域の皆さんにお金の余力がないと作れないし、お金を出すことで自分達にご加護が来るということを感じられるのが、こうした残された物である。

(岡理事の補足) :

- ・博物館の『建物ア・ラ・カルト』という本があり、その中で建物の説明がされている。その中に「一部色が残っている」と記載されており、かつては彩色された非常に綺麗なものだったと思われる。(下記写真左参照)
- ・動物が10種類くらい彫られている。ウサギとかゾウとか。
- ・橋掛かりは非常に珍しい。普通は石畳、石の間が多い。この橋掛かりも含めて流山市の有形文化財に指定されている。(下記写真右参照)



(再度北澤次長) :

- ・石畳について。拝殿には靴を脱いで上がってくるところと、土足のまま上がれるようになっていところもある。市内でいうと市野谷の天神社が床ではなくて石畳状の拝殿になっている。古い段階の神社の拝殿の一つの形だったと言えるのではないか。
- ・本殿の形について。メインの柱が1.8m、1間×1間の正方形の形。大きい神社になるほど、それが2間になり、3間になる。あとは伊勢神宮や諏訪神社など神社の種類によっても大きさが変わってくる。地方の神社はだいたい“1間作り”が基本的な形。
- ・屋根は後ろに短くて前に長い“1間流れ”の作りになっているのも特徴の一つ。
- ・神社によっては屋根がむき出しの神社もある。ここは覆屋でカバーしてあるので長期保存のためには良い。例えば平泉の金色堂などのように、時を経て金箔が剥がれた為に修理の時、覆屋を設けた。(次頁写真参照)



6. 最後に山崎総代のお話：

- ・10数年前、本殿の奥に「開けてはいけない」と言われていた扉があった。あまりにも汚れがひどいので開けたところ、扉の奥に御神鏡があり、またその奥に隠し扉があった。そこにも御神鏡があった。それほど古いものではなかった。そんな構造になっている。 **（御神鏡については追加資料④参照）**
- ・今では正月4日間で約20,000人もの参拝客がある。昔は地元の人が100人とか200人くらい。甘酒は5,000杯以上振る舞う。
- ・毎月第3日曜日は自主的に集まってくれて掃除をしており、綺麗にしている。
(その他はよく聞き取れず)

以上

(追加資料)

資料①：拝殿賽銭箱脇の石段に記載されている名前

- ・賽銭箱右側：大工 板倉喜太郎、石工 梅澤助蔵、鳶職 海老原豊吉、丹後 建具師 増田浅五郎
左官 森田徳次郎、人夫頭 高橋末五郎
- ・賽銭箱左側：石工 小早川茂八、思井 木挽 伊原新助、社衛 秋元佐治エ門、世話人 材木商
松本伊三郎、番匠 島根佐兵衛 明治四十二年十月

資料②：北澤館長の「手元資料」について（写真は2024年開催の博物館企画展に展示されたものを編集）



（写真は博物館「企画展」資料より）

資料③：板絵について



（当初の予想）雷神の尾？

雷神？

神官と読経する僧侶？

梅？

雷と梅、ということで「菅原道真と読経する僧侶、道真が雷から僧侶を守っている？」

（理由） ①博物館「企画展」の写真では僧侶と思った人に、長い髪の毛が。その後ろにも黒い服の人がいる？



②板絵を描いたのは、「寺崎公業（東京美術学校（現東京芸大）教授が弟子を引き連れて描いたと伝わる）」ということで、寺崎公業について調べてみると『廣業画集』（明治43年）の中に似たような絵を見つけた。タイトルは「六歌仙（其一）」。（国会図書館デジタルコレクションより）



小野小町

在原業平

僧正遍照

資料④：山崎総代の挨拶に出てきた「御神鏡」について（参考資料）

博物館企画展に「羽黒神社神鏡」が展覧されていた。その解説文は下記。

「文化3年(1806) 羽黒神社神鏡」：
 (要旨)「羽黒神社の境内地は明治41年に売却された。その資金は明治42年赤城神社拝殿の建築資金となった。その際に赤城神社の末社とされ神鏡が伝えられたと考えられる」

文化3年(1806) 羽黒神社神鏡(はぐろじんじゃしんきょう) 赤城神社蔵
 赤城神社本殿に収納されていた、木製の神鏡である。表面の鏡面部には「北総葛飾郡流山郷 羽黒大権現 大別當光明院」、柄部には「文化三丙寅二月吉□」の墨書があり、赤城神社と同じ別當寺光明院により管理されていた羽黒神社の鏡であることがわかる。
 羽黒神社は、赤城神社から南に少し離れたところに境内があった。文化3年(1806)に編修された「関宿通多功道見取絵図」(写真を展示中)に「羽黒」と記され、鳥居や社殿、鎮守の森が描かれており、当時は赤城神社とは別の神社であったことがわかる。
 この羽黒神社の境内地は、明治41年(1908)に境内地が売却されたが、それは明治42年(1909)に建立された赤城神社拝殿の建築資金となっている。おそらくその際に赤城神社の末社とされ、神鏡のみが伝えられたものと考えられる。鏡の裏面には、多数の梵字(仏を一字で表したものが書かれており、別當寺光明院の影響が表れている。
 江戸時代に流行した出羽三山信仰の流山における流布や、神仏習合(仏教と神道の融合)を具体的に示す資料といえる。

資料⑤：津島牛頭天皇版木（嘉永2年(1849)のこと

版木解説文要旨：

「すべての災いは心身より起こる。
和歌を習い詠むことで心身を浄化すれば、疫病や災いを除くことができる」として和歌を奨励するもの。
スサノオノミコトは和歌の祖であり
 牛頭天皇は翻って防疫神でもあることから内容に齟齬はない。

嘉永2年(1849) 津島牛頭天王版木(ごすてんのうはんぎ) 赤城神社蔵
 赤城神社の本殿から発見された版木で、文字が浮彫のレリーフ状である。実際に刷られたようで、表面は墨が浸透していて黒味を帯びている。
 表面中央「津島」は愛知県津島市に鎮座する津島神社のことで、全国天王社の總社である。弥五郎殿・居森殿は、津島神社の社殿で、それぞれ現神殿・旧神殿跡の名称である。裏面には、「山本正義 花押 之を拵(こしらえ)」との墨書があるが、署名人については不明である。
 「牛頭天王」は、京都・祇園社(現八坂神社)の祭神で、最強の行疫神(疫病をもたらす神)として名高い。祇園祭は本来、牛頭天王を鎮めるための祭りである。
 版木の文字を解説してみたところ、その内容は「すべての災いは心身より起こる。和歌を習い詠むことで、心身を浄化すれば、疫病や災いを除くことができる。」として、和歌を奨励するものであった。スサノオノミコトは和歌の祖であり、牛頭天王は翻って防疫神(疫病を防ぐ神)でもことから、内容に齟齬はない。天保～弘化年間(1830～1848)には疫病が多く、この版木そのものを無病息災祈願の対象として祀ったものであろう。
 赤城神社は、庚申信仰、富士信仰、牛頭天王信仰などの資料を収蔵し、末社も多いことから、さながら文化的拠点施設のような役割を担っていたようである。